

◎ やきものの心(わざ)に挑んだ「瀬戸・美濃の美」展

公益財団法人 横山美術館 館長 鈴木 俊昭

瀬戸と美濃

瀬戸と美濃(多治見・土岐・瑞浪)は、人為的な行政区画(県)があるため、一見、遠く離れた感じがあるが、地政学的には、隣接した地域であり古くから交流があったと思われる。瀬戸は陶祖・加藤四郎左衛門景正以来、加藤姓が多い事で有名だが、美濃にも加藤姓が多く見られ、人的な交流があった証となる。千年以上のやきもの造りの歴史を誇る両地域は、現在に於いても日本のやきものづくりをリードしており、陶磁器生産高においても全国の5割(2018 経産省工業統計)を産出するやきもの王国となっている。歴史を紐解いてみると、瀬戸は、鎌倉時代から室町時代にかけて我が国初の施釉陶器、いわゆる“古瀬戸”を世に送り出し、その後、“せともの”が焼き物の代名詞となるに至った。美濃では、室町時代から約200年に渡って美濃を支配してきた土岐氏の影響がある。土岐氏は、清和源氏の血を引く豪族で京都の将軍家とも近く、京都の公卿の生活様式を採り入れ、茶道を好み、自領内での茶器の制作を行った。こうして美濃では、志野、織部、黄瀬戸、瀬戸黒といった新しい日本のやきものが次々と生まれて発展の道を辿った。しかしながら、江戸初期、東濃一帯は、幕府の直轄地となり、物産に関しては、すべて尾張藩の規制を受ける事となった。この為、美濃焼の名は使えず、“せともの”として国内外に販売される事となり、美濃焼の窯屋にとってこの耐え難い措置は、明治維新まで続く事となる。



染付花鳥図大花瓶 川本樹吉 明治



高浮彫唐子海游図 成瀬誠志 明治時代

瀬戸の近代陶磁器

瀬戸は、焼き物の産地として長い歴史を持っていたが、磁器の生産に関しては、有田や京都に大きく遅れをとっていた。18世紀後半、他の産地が陶器から磁器の生産へと大きく転換している中、瀬戸は陶器の茶碗、湯飲み、小皿などを生産していたが、江戸、大阪、京都では、肥前磁器に大きく差をつけられ、尾張藩の財政も困窮し、磁器の生産が急務であった。

こうした背景の下、瀬戸の陶工、加藤民吉が磁器の製法を習得する為 1804 年肥前へと旅立ち 3 年 4 ヶ月の修行を得て1807年、磁器の製法、上絵錦絵の技法を携えて瀬戸へ帰還、瀬戸磁器発展の礎を築

いた。瀬戸では磁器製法を得た事により、さまざまな磁器の生産が可能となり、豊富で良質な窯業原料により 瀬戸磁器は日本全国へ広まった。

明治時代になると、政府の輸出振興策を推し進める為、国の威信をかけて欧米で開催された万国博覧会へ日本の陶磁器が出品される事となる。1873(明治 6)年にオーストリアのウィーンで開催された万国博覧会には、明治政府が国を挙げて参加した。窯業部門では、出品作品を制作する為、博覧会開催の前年である 1872(明治 5)年に東京の浅草柴崎町に博覧会事務局付属磁器製造所(東京錦窯)を設立し、全国から名工を集めた。ウィーン万博には、瀬戸、美濃の他、九谷、京都、有田、薩摩などの産地から 200点あまりの陶磁器が出品されたが、薩摩焼の華麗な絵付けの装飾陶器だけでなく、細密な染付画の瀬戸磁器も高く評価され、輸出への道が開ける事となった。明治時代、瀬戸では多くの新しい技術の導入が図られたが、明治初頭には、肥前の田代安吉によって、化学呉須(酸化コバルト)が伝えられ、加藤友太郎等により石膏型鑄込法が加藤五助、川本柁吉に伝えられている。1876(明治 9)年に米国フィラデルフィアで開催された万国博覧会には、瀬戸から川本柁吉、加藤五助、加藤紋右衛門、加藤繁十、加藤周兵衛が多数の作品を出品し、その多くは、欧米の美術館の所蔵品となっている。



染付花唐草文大飾壺 加藤左衛門 明治時代



染付花鳥図花瓶 加藤紋右衛門 明治

美濃の近代陶磁器

美濃焼の歴史は古いが、「美濃焼」の名称を使えるようになったのは、1872(明治 5)年からである。この年に陶磁器製造の権利を象徴する窯株制度が廃止され、誰でも自由に陶磁器の生産・販売が出来るようになった。その結果、美濃で焼かれたやきものは“せともの”ではなく産地の名で「美濃焼」として市場に出される事となり、美濃の人達をおおいに喜ばせた。明治初頭から、染付絵付けに使用する発色が鮮やかで安価な酸化コバルトが、貴重な美濃産の山呉須に代わって使われるようになり、量産品に銅板転写が導入され、国内最大の生産量を誇る陶磁器生産地としての美濃の基盤を築いていった。一方では、一般家庭で使われる量産品生産と一線を画す美術陶磁器の制作も隆盛を極め、加藤五輔の極めて精巧な絵付けの染付磁器は、1878(明治 11)年のパリ万国博覧会、1893(明治 26)年のシカゴ万博、1900(明治 33)年のパリ万博でそれぞれ銅賞を受賞、海外で高く評価され美濃焼の美術工芸品としての水準の高さを世に示すきっかけとなった。

多治見の西浦家は、江戸時代から庄屋を務めてきた豪商で、幅広く商売を行っており、陶磁器の販売を海外から国内まで幅広く行っていた。西浦圓治(5代目)は1894(明治27)年には、多治見の尾張坂に窯を築き、植物や鳥をモチーフにソフトな色調の絵の具を使った吹絵装飾の「釉下彩」作品を生み出していた。これらの作品は1904(明治37)年のセントルイス万国博覧会で金賞を受賞し、西浦の名を高めて海外へ多くの作品が輸出される事となる。成瀬誠志は、(現)中津川市茄子川に生まれ、地元で製陶と絵付け技術を学んだ後、1871(明治4)年東京へ出て、美濃にはない超細密画の「東京薩摩」を作っている。増上寺芝公園安立院で工場を構え、素地造りから上絵付けまで行った。1878(明治11)年のパリ万国博覧会では、東京薩摩で銅賞を獲得しており、海外でもその細密な絵付けに高い評価がなされた。1889(明治22)年には、茄子川に帰郷して多くの作品を残したが、特に1893(明治26)年のシカゴ万国博覧会に出品した、「日光陽明門」は、輸送途中に破損したもののあまりの素晴らしさから一部のみが展示され、銅賞を受けたという。



染付花鳥図六角花瓶
加藤五輔 明治前期



西浦焼釉下彩花瓶
西浦圓治(5代) 明治後期



西浦焼釉下彩ポット
西浦圓治(5代) 明治後期

※鈴木俊昭氏は、2021年4月より横山美術館 顧問に就任。

横山美術館では、現在「やきものの心(わざ)に挑んだ『瀬戸・美濃の美』展」を開催中です。

【展覧会情報】

会期： 2021年3月13日(土)～6月13日(日)

会場： 公益財団法人横山美術館
名古屋市東区葵1-1-21

TEL:052-931-0006

開催時間： 午前10時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

休館日： 月曜日(祝・休日の場合は翌平日)

入館料： 一般1,000円、高・大生・シニア800円

